



1. 出兵前に撮った進さんの父・義盛さんの写真。義盛さんは昭和19年10月に亡くなった（写真はS18頃） 2. 進さんと一緒に戦後の過酷な環境を乗り越えた母・トシエさんと妹・フジさん

戦没者遺族の高齢化は、

減少する戦争体験者
それでも続く活動を

農業に悪戦苦闘。当時の農業は牛や馬を使うのが一般的で、力の弱い女性が牛や馬を引くのは難しかった。「あの頃は、とにかく食料がない。私もあまり覚えていないけれど、麦が半分、米が半分ですよ。非常に貧しい生活が続きました」。

戦争の記憶を風化させない取り組みに深刻な影を落している。市内でも遺族の多くが80歳を超え、戦争体験を直接語ることでできる人が年々減少しているのが現状だ。「小林市全体を見ても、多くの方が80歳を超え、遺児も亡くなっていく」。慰霊の場の維持も難しくなっている。市内では、須木地区の遺族協会が今年解散し、野尻地区も5年前に解散。役員のなり手不足は深刻で、活動の継続が困難になっている。その一方で、平和への想いを次世代へつなぐための活動も行われている。市遺族協会では、30人ほどで組織する「青年部」が結成され、将来は彼らが会の活動を引き継いでいくことが見込まれている。多くは50代以上だが、戦没者の孫世代にあたる彼らが、戦争の記憶と平和への願いを未来につなぐ重要な

役割を担っている。「私たちは高齢になってきたから、できないことが多くなってきた。若い人たちに移行していくことが、平和な時代を未来につなげるためにも絶対に必要」と、次世代への期待を語る。忘れてはいけない戦争の記憶戦後80年が経過し、戦争を知らない世代が増える中で、体験者の直接の声は貴重なものとなっている。戦争を忘れてしまうことは恐ろしいことだと進さんは警鐘を鳴らす。今もなお、世界の各所で戦争が起きている現実があるからだ。「戦争があつたということ。記憶のほとんどが苦しかったことばかり。戦争の無い今が、良いということをどうか知ってほしい」。この言葉には、戦争に苦しまれた進さんの切実な願いが込められている。

遺族が語る戦争の悲劇 記憶の継承、 平和への願い

戦争が残した深い傷跡と、平和への切なる願いを語った橋満進さん。進さんの父は、彼がわずか4歳の時に戦死。記憶はほとんどないが、母から聞かされた話が、戦争の残酷さを鮮明に伝えている。



小林市遺族協会 会長 橋満進さん（85）

幼き日の別れと
遺された母子の苦難

「何回通つても父とは決して会うことはできなかった。玄関までしか行けず、でも父が好きだったからと持って行った団子は全部取られる。そんな時代」。都城の部隊に入隊した父に会うため、母と妹と3人で小林から都城まで汽車で通った進さん。面会は一度も叶うことなく、進さんの父は台湾沖で乗船していた船が攻撃を受け、33歳という若さで命を落とした。遺骨すら戻ることなく「船も水の底だから、箱だけが帰ってきた。中には何も入っておらず、ただ紙切れが一枚。どこで戦死したのか、というのが書かれていただけ。今では考えられないでしょう」と、当時のむなしさを語る進さん。終戦後、遺された家族を待っていたのは想像を絶する苦難だった。28歳で夫を亡くした母は、体力仕事の

令和6年度「平和への思い」
作文最優秀作品

「平和な世界へ」

種子田 亜優さん
（当時南小6年）

皆さんは、戦争の怖さを実感したことはありませんか。戦争とは、国と国との武力を用いた争いのことであり、多くの犠牲者が出る、とても怖く危険で、悲惨なことです。そんな戦争が昔、日本でも起こっていました。それは決して忘れてはいけない日です。1945年8月6日の午前8時15分に広島に原子爆弾が落とされ、その3日後の8月9日の11時2分には長崎に原子爆弾が落とされました。アメリカは、世界で初めて広島に原子爆弾を落としました。その原子爆弾により、約14万人の犠牲者が出ました。原子爆弾が落とされた真下にあった建物も焼け崩れ、今では「原爆ドーム」として現在にも残っています。私は今、当たり前のように家族と過ごし、学校に通い、日々を過ごしています。その当たり前の日常が、ある日突然なくなると考えるととても怖いで

す。家族に会えない、家族や友達がどこにいるかもわからない...そんなことを考えたくもないです。原爆を落とされた広島と長崎の人たちは当たり前の日常を一瞬で奪われました。私のひいおじいちゃんも14歳の時に軍隊に入り、戦争を経験しました。94歳になった今でも私が会いに行くと戦争の話をします。最近まで週に一度、語り部として市役所に行き、戦争についての話をしていました。何十年たった今でも、強く記憶に残っているぐらい怖いものなのだと思います。戦争について知ったことで平和への想いがより強くなりました。当たり前の日常を当たり前だと思わず過ごしていき、当たり前のことに感謝したいです。今、世界のどこかでも戦争によって苦しんでいる人がいます。戦争のない平和な世界が訪れますように自分ができることを探し、行動したいです。



戦没者追悼式(小林地区)

先の大戦における戦没者の方々を追悼するとともに、世界恒久平和を祈念します。また、今年度、市内小中学生が書いた、「平和への思い」を題材とした作文の最優秀作品の朗読なども行われます。

■日時 10月3日（金曜） 10時開式
■場所 文化会館



令和7年度慰霊巡拝

国外での戦没者や拘留中死亡者を慰霊するため、遺族代表による慰霊巡拝が実施されます。実施地域や時期などの問い合わせや参加申し込み先は次の通りです。
●申・問＝県福祉保健部指導監査・援護課
Tel 0985・26・7061

令和7年度被爆二世健康診断

両親のどちらかが被爆者健康手帳を所持しており、原爆投下後に生まれた人（胎児被爆者は除く）で、健康診断受診を希望する人を対象に健康診断を実施します。（事業詳細は29頁に掲載）



機銃掃射で娘を亡くした父・清吉を演じる
ひだか けいすけ
日高 啓介 さん (53)

笑顔の奥にある 言葉にならない想いを伝える

僕が演じる清吉はもともと腕利きのパン職人でした。でも、戦争の空襲で、可愛がっていた長女のめぐみを亡くしてしまいます。そのあまりのショックで、記憶が曖昧になってしまった。今はいつもぼーっとしていて、頭の中は亡くなった娘のことばかり。

彼は、すごく愛情深くて、誠実で真面目な、ごく普通の人なんです。だからこそ、娘が目の前でいなくなったという現実を受け入れられなかった。

このお芝居は、戦争の悲惨さを描いてはいますが、僕が観客に感じてほしいのは、それだけではありません。人と人が肩を寄せ合って生きていく温かさです。人は一人では生きていけない。その一番小さなコミュニティが家族で、その家族を大事にし、隣にいる人を思う気持ち。この物語には、そういう当たり前で、でも一番尊いものが、たくさん詰まっている気がします。



普段は活発な意見と笑い声が交わされる和やかな雰囲気だが、物語が核心に迫る場面では場の空気は一変、長年の交流で育まれた息の合った掛け合いがみられた



西小林国民学校の機銃掃射をもとに制作された演劇 小林三姉妹 ～幸せのパン種～

出演：25 馬力＋こふく劇場

2016 年公演時の写真

小林市を拠点に活動する「劇団 25 馬力」と都城の劇団「こふく劇場」が、西小林国民学校の機銃掃射をモチーフに制作された演劇を上演する。
終戦間際の悲劇に巻き込まれた家族を描く本作を通じて伝えたい平和への想いを、劇団代表の神水流 じん子さんが語る。



劇団「25 馬力」
かみづる じん子 さん (53)
代表 神水流 じん子 さん (53)

「戦後80年になるから」

私たち劇団25馬力が旗揚げして25年。この節目の年に、再び『小林三姉妹』幸せのパン種』を上演します。この作品は、今は亡き劇作家の藤井貴里彦さんが戦争の悲しみを忘れてはならないという願いを込め、私たちとこふく劇場の二つの劇団のために書き下ろしてくれた作品です。

初演から時が経ち、私自身も歳を重ね、その間に藤井さんはいなくなってしまう

いました。キャストも変わります。でも、演じるたびにこの物語は、まるでバームクーヘンのように一層一層、深みと厚みを増していくのを感じるんです。

初演の時、私たちはこの物語の背景にある「西小林の悲劇」について学びました。機銃掃射で家族を亡くされた方のお宅に伺い話を聞き、今も弾痕が残る場所を見せていただいたり。

そうして私たちが直接見聞きしたことを新たなキャストに伝えていく。

そして、公演の前には必ず西小林小学校の慰霊碑にお花を持って行くようにしています。

知ってもらうことが 大事だと信じて

私は、観るときに「体温」を感じることができなのが

藤井さんという人がいたことを感じてもらえたら。

藤井さんは戦争について生前、こう記しました。

「今も世界のどこかで戦争が続いている。砲撃の音が聞こえないとしても、戦火の中にある人々と私たちが同時代に生きていることは確かだ」。

その状況は、今も変わっていません。

未来を担う子どもたちには、ただ幸せでいてほしい。そのためには、私たちがこの物語を伝え、「知ってもらおう」ことが大事なのだと信じています。

小林三姉妹 ～幸せのパン種～

作：藤井貴里彦／演出：永山智行

2025年8月9日(土) 19時
8月10日(日) 14時
※開場は開演の30分前
小林市文化会館小ホール

ねえさん、ありがとう。
タロ、ありがとう。



▼チケット情報など、劇の詳細は
「劇団 25 馬力」公式 SNS で確
認してください



▲ X(ツイッター)



▲ Facebook

Mail 2025bariki@gmail.com
Tel 23・7995 (留守電対応)

●チケット購入・問い合わせ

本事業は、こばやしの人と
まちが輝く！元気と笑顔ハッ
シン事業を活用しています。

■その他

※当日券は500円増、ペア
は予約限定で枚数に限り有り

ペア 4000円

U25割 1000円

一般 2500円

■チケット

劇団こふく劇場、
日高啓介 ほか

■出演 劇団25馬力、

■場所 文化会館小ホール

■日時 8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演

19時開演

8月9日(土曜)

8月10日(日曜)

14時開演



子どもたちの心に 「平和の種」をまく

教科書で学ぶ歴史。それだけでは伝えきれない、一人ひとりの痛みや悲しみ、そして平和への強い願い。子どもたちは修学旅行で広島や長崎、知覧などを訪れ、戦争の実相に触れる。そして、地域で暮らす戦争体験者が語る言葉は、子どもたちの心に深く刻まれる、何よりの「生きた教材」だ。



ひさじま しんこ
久嶋 新子 さん (86)

7月11日：須木小学校で講話

—— Profile ——

当時日本の統治下にあった台湾で生まれ、3歳の時に太平洋戦争が開戦。9歳の時に引き揚げで日本へ。戦争は幼少期の数年間だけの体験だったが、忘れられない記憶として強く心に残っているという

戦争が始まったのは私が3歳の時。戦いは年々激しさを増し、日本と同じように台湾でも学童疎開がありました。4歳上の姉が疎開する時、母と見送りに行ったことを覚えています。広い運動場にはバスが並び、今にも泣き出しそうな顔をしている姉。私も母と一緒に手を振りましたが、あの時の寂しさは忘れられません。いつ帰れるかも分からない、親との別れというのは、幼い子どもにとつてどれほど辛かったことでしょう。終戦間際、小学校に上がる頃には空襲も激しくなり、命の危険を感じることもありました。友人と川に魚釣りに行っていたときのことで。突然の空襲警報。周辺には隠れるところも



子どもたちは、久嶋さんが話す戦時中の生々しい体験談を真剣な表情で聞いていた

ないので、一目散に走って逃げました。たまたま近くに倒れていた木の陰に隠れた直後、目の高さくらいかと思うほど、目前に敵機が飛んできたんです。なんとか銃撃されずに済みましたが、本当に運が良かったと、今でも思い出し、怖くなります。未来を担う子どもたちには、平和の大切さや戦争の恐ろしさを知り、この平和な世の中を、どうか守り続けてほしいです。



須木小学校5年
なつき ゆき
夏木 結風 さん

この平和がずっと続いてくことを願っています

1番心に残ったのは疎開の話です。実際に話を聞くまでは、小林でも疎開している人や戦争に出ている人はいないと思っていたので、とてもびっくりしました。空襲の話もあり、戦争中の子供たちは、とても苦しい思いをしていて、早く戦争が終わってほしいと願っていたと思います。

9月には修学旅行で平和学習もあります。今日聞いた話を思い出しながら、昔の人の気持ちを考えながら学んできたのです。

戦争の話を聞いた今では、みんなが日常で、普通に暮らせる今が平和なんだと感じました。この平和がずっと続いていくことを願っています。



西小林中学校2年
やまもと いちか
山本 一花 さん

6月22日
修学旅行で広島を訪問

平和学習で学んだ「当たり前」の尊さ

広島での平和学習のこと。事前に写真では見ていましたが、実際に原爆ドームの前に立つた時、一発の爆弾が落とされた場所だ、と強く意識し、私は戦争の恐ろしさを肌で感じました。特に心に深く刻まれたのは、被爆した子どもの話。重度の火傷を負った子どもたちの伸びてきた皮膚を先生がハサミや素手でちぎり取ったというのです。この話を聞いた時、一発の爆弾がどれだけ多くの命を奪い、どれだけ悲惨な出来事を引き起こしたのかを痛感しました。「どうして私たちがこんな目に遭わないといけないの？」もし私がその時代の子どもだったら、きっとそう思ったで

しょう。食料もなく、お風呂にも入れず、中学生から戦場に行かなければならない。想像するだけで、どれだけ辛かったか。私たちが今、普通に生きていること。家族や友達と当たり前のように過ごす時間。家に帰ってこられる瞬間。これらは、昔の人たちにとっては決して「当たり前前」ではなかった。そのことに改めて気づいた時、私は今この瞬間がどれだけ幸せなのかを感じることができました。これから、原爆の日や終戦の日などには、世界中の人たちが平和を祈って黙とうをします。私も、戦争が二度と起こらないように、この平和を大切にしていきたいと強く思います。



西小林中学校 教諭
わきだ やすひろ
早田 泰大 さん

子どもたちが平和について深く考えるきっかけになれば

「戦争はいけないこと」。それは子どもたちも理解しています。しかし、動画や画像だけでなく、実際に現地に赴くことでその学びは深まります。特に印象的だったのは、原爆資料館での子どもたちの姿。当時の写真などを真顔で、真剣な表情で見入る姿からは、彼らがどれほどこの学びに向き合ってい

るのが伝わってきました。

この体験が子どもたちが平和について深く考えてくれるきっかけになってくれればと願っています。

終戦の日には、修学旅行で見たことや聞いたことを思い出しながら、平和を願って黙とうするなど、この学びを行動に移してもらえたらと思います。

「私が幸せになればなるほど、可哀想だったなと思う」。

91歳の木佐貫ヒサエさんの言葉が、深く胸に突き刺さる。腕に銃弾を受け、親友を亡くした「あの日」から80年。

今、ヒサエさんの傍らには、孫の智菜美さん、そしてひ孫の康誠^{やすなり}くんの弾けるような笑顔がある。戦争を生き抜いたからこそ手にできた、かけがえのない宝物だ。

しかし、その笑顔は、あまりにも奇跡的な偶然の上にあった。もし、あの日抱えていた弁当箱がなければ。もし、銃弾がほんの少しずれていたら。ヒサエさんの命は絶たれ、智菜美さんも、康誠くんも、この世に生を受けることはなかった。

戦争とは、今ここにあるはずの誰かの未来、その未来に生まれるはずだった幾多の笑顔を、無慈悲に奪い去る行為に他ならない。

孫の智菜美さんは、祖母の体験を「命のバトン」と表現する。「祖母がもしあの日：と思えば、私はここに存在しない。命のつながりをすごく感じます」。その言葉は、単なる血縁の物語ではない。

戦争の悲惨さ、理不尽さ、そして平和の尊さという重い記憶を受け継ぎ、未来へ語り継いでいくという、世代を超えた決意の証だ。

小学生の時にヒサエさんの話を聞いて作文を書いたと話す智菜美さん。まさにそのバトンの第一走者としての誓いだったのだろう。

ヒサエさんの脳裏に今も焼き付いて離れない、水を求めながら息絶えた友の姿。彼女たちにも、ヒサエさんと同じように、愛する人と結ばれ、子や孫に囲まれる幸せな未来があったはずだった。

「戦争がなければ、みんな私のように：」。

その言葉にならない感情は80年の時を経てもなお、私たちの心を激しく揺さぶる。

戦争を直接知る世代が年々少なくなっていく。生々しい記憶の熱量が薄れ、歴史の教科書の一行になってしまいかねない今、私たちはヒサエさんから手渡された「命のバトン」を、どう未来へつないでいけば良いのだろうか。

ヒサエさんが見つめる康誠くんの笑顔。それは、私たちが守るべき未来の象徴だ。

「命が一番大事」「あの戦争だけはしないほしい」。

その切なる願いを、決して忘れてはならない。ヒサエさんの記憶を、願いを、私たち自身のものとして受け止め、語り継いでいくこと。

それこそが、戦争で失われたすべての命に応え、二度と悲劇を繰り返さないと誓う、私たちの世代に課せられた責務なのではないだろうか。

—— 戦後 80 年 ——

未来に繋げ

命のバトン

原爆死没者と戦没者を偲び
戦争のない 平和な未来を願う

原爆死没者と戦没者を偲び、平和の実現を祈るためサイレンを鳴らします。
1分間の黙とうをお願いします。

■日時

- ▼広島原爆の日 8月 6日（水曜） 8時 15分
- ▼長崎原爆の日 8月 9日（土曜） 11時 2分
- ▼終戦の日 8月 15日（金曜） 12時

■忠霊塔開放期間

8月 13日（水曜）～8月 15日（金曜）

左から
木佐貫ヒサエさん
弓場康誠くん
弓場智菜美さん